

2/4 Wed.

第655回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.655 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor

ヴァイオリン
Violin

第1コンサートマスター
First Concertmaster

細川俊夫
HOSOKAWA

[休憩]
[Intermission]

ブルックナー
BRUCKNER

マリオ・ヴェンツァーゴ *-p.5*
MARIO VENZAGO

諏訪内晶子 *-p.8*
AKIKO SUWANAI

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

ヴァイオリン協奏曲〈ゲネシス(生成)〉[約18分] *-p.11*
Violin Concerto "Genesis"

交響曲 第7番 ホ長調 WAB107 (ノヴァーク版)
[約64分] *-p.12*

Symphony No. 7 in E major, WAB107 (Nowak edition)

I. Allegro moderato

II. Adagio: Sehr feierlich und sehr langsam

III. Scherzo: Sehr schnell

IV. Finale: Bewegt, doch nicht schnell

※当初の発表から曲目が一部変更になりました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））

独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：アフラック生命保険株式会社

2/13 Fri.

第689回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.689 / Suntory Hall 19:00

2/15 Sun.

第148回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.148 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor

ピアノ
Piano

第1コンサートマスター
First Concertmaster

ウンスク・チン
UNSUKE CHIN

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

マーラー
MAHLER

ケレム・ハサン *-p.6*
KEREM HASAN

中川優芽花 *-p.8*
YUMEKA NAKAGAWA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

スビト・コン・フォルツァ [約5分] *-p.14*
Subito con forza

ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品19 [約28分] *-p.15*
Piano Concerto No. 2 in B flat major, op. 19

I. Allegro con brio

II. Adagio

III. Rondo: Molto allegro

交響曲 第1番 ニ長調〈巨人〉[約53分] *-p.16*
Symphony No. 1 in D major "Titan"

I. Langsam. Schleppend. – Immer sehr gemächlich

II. Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell

III. Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen

IV. Stürmisch bewegt

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））

独立行政法人日本芸術文化振興会

協賛：大成建設株式会社 (2/13)

協力：横浜みなとみらいホール (2/15)

2/19 Thu.

非破壊検査 presents 第43回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT IN OSAKA, No.43, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd / Festival Hall 19:00

2/21 Sat.

第284回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.284 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

2/22 Sun.

第284回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.284 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor

チェロ
Cello

第1コンサートマスター
First Concertmaster

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY

[休憩]
[Intermission]

フォーレ
FAURÉ

ラヴェル
RAVEL

上岡敏之 -p.7
TOSHIYUKI KAMIOKA

鳥羽咲音 -p.9
SAKURA TOBA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

幻想序曲〈ロミオとジュリエット〉[約23分] -p.19
Fantasy Overture "Romeo and Juliet"

ロココ風の主題による変奏曲 イ長調 作品33
[約18分] -p.20
Variations on a Rococo Theme in A major, op. 33

付随音楽〈ペレアスとメリザンド〉組曲 [約18分] -p.21
Suite "Pelléas et Mélisande"
第1曲「前奏曲」
第2曲「糸をつむぐ女」
第3曲「シシリエンヌ」
第4曲「メリザンドの死」

ボレロ [約13分] -p.22
Boléro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）（2/21、22）
特別協賛：非破壊検査株式会社（2/19）
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会（2/21、22）
協力：コジマ・コンサートマネジメント（2/19）

指揮

マリオ・ヴェンツァーゴ

MARIO VENZAGO, Conductor



独自の音楽性で
新たな世界を描く
スイスの名匠

2023年9月の読響との演奏会を成功に導いた名匠が再客演。骨格まで浮き彫りにするような音楽作りで、得意のブルックナー〈交響曲第7番〉を披露する。

1948年スイス・チューリヒ生まれ。ウィーン国立音楽大学でハンス・スワロフスキーらに師事。ヴァンタートゥール・ムジークコレギウム、ハイデルベルク市立劇場、ブレーメン・ドイツ室内フィル、グラーツ歌劇場、バーゼル響、バスク国立管、インディアナポリス響、イエーテボリ響の首席指揮者や音楽監督などを歴任。2010年から14年までロイヤル・ノーザン・シンフォニアの首席指揮者を、10年から21年夏までベルン響の常任指揮者・芸術監督を務めた。

これまでにベルリン・フィル、ベルリン放送響、ボストン響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、フランス国立放送フィル、ロンドン・フィルなど世界各地の楽団に客演している。オペラでは、バーゼル歌劇場、ベルリン・コーミッシェ・オーパーなどで活躍。

ベルク、ノーノ、グバイドゥーリナら近現代音楽も得意とし、数多くの録音をリリース。また、5つの楽団を振り分けたブルックナーの交響曲全集（CPOレーベル）は国際的に高い評価を受け、「史上最も刺激的で、そして示唆に富んだ、斬新なブルックナー」と評されるなど、日本でも話題を呼んだ。

近年は指揮者として活動するほか作曲にも力を注いでおり、21年にはソーヤン・ユンをソリストに迎えてベルン響とヴァイオリン協奏曲を世界初演。現在、オペラを含む様々な作品の出版準備を進めている。2021年の初共演以降、読響とは3度目の共演。

2/4
定期

Maestro

2/13
名曲

2/15
横浜マチネー

Maestro

指揮

ケレム・ハサン

KEREM HASAN, Conductor

イギリスのフレッシュな
俊英が振る
活力みなぎる〈巨人〉



©読響

欧州で目覚ましい活躍を見せて注目を浴びるイギリスの俊英が読響に再登場。みずみずしい感性で構築された〈巨人〉で、大胆かつ緻密なタクトを展開する。

1992年英国ロンドン生まれ。スコットランド王立音楽院でピアノと指揮を学び、スイスのチューリヒ芸術大学などで研鑽^{けんさん}を積む。ロンドンで開催されたドナテッラ・フリック指揮コンクールのファイナリストとして注目を浴び、2017年ネスレ&ザルツブルク音楽祭指揮者コンクールで優勝。巨匠ハイティンクに招かれ、シカゴ響やバイエルン放送響にアシスタントとして同行し、18年にはハイティンクの代役としてロイヤル・コンサートヘボウ管を指揮して一躍脚光を浴びる。19年にはガッティの代役として同楽団のツアーにも同行した。

19年9月から23年6月までオーストリアのチロル響の首席指揮者を務めた。これまでにロンドン響、バイエルン放送響、ロイヤル・フィル、BBC響、ドレスデン・フィルなど欧州の楽団に客演。22年夏にはアメリカ・デビューを飾り、ミネソタ管、デトロイト響、ユタ響にも客演するなど、活躍の場を広げている。オペラ指揮者としてウェールズ・ナショナル・オペラでヴェルディ〈運命の力〉を、イングリッシュ・ナショナル・オペラでモーツァルト〈コジ・ファン・トゥッテ〉を、チロル州立歌劇場でサン＝サーンス〈サムソンとデリラ〉などを指揮していずれも成功に導いたほか、グラインドボーン音楽祭ではモーツァルト〈魔笛〉を指揮して好評を博した。読響とは23年6月以来、2度目の共演。

指揮

上岡敏之

TOSHIYUKI KAMIOKA, Conductor

鬼才・上岡の音楽が
会場を熱狂の渦に
巻き込む！



©読響

ドイツを拠点に欧州で活躍し、音楽へ愛を注ぐ孤高の芸術家・上岡敏之が4つの名曲を響かせ、魂を震わせるような音楽の核心に迫る。

東京生まれ。東京芸術大学でマルティン・メルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。ロータリー国際奨学生としてハンブルク音楽大学に留学し、クラウスベーター・ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレペティートルおよびカベルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。

これまでに、エッセン歌劇場の第1指揮者、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィル首席指揮者、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場音楽総監督及びインテンダントなどの要職を務めた。ヴッパータール響とは二度の日本ツアーを行い、好評を博した。現在コペンハーゲン・フィル名誉指揮者。ケルン放送響、バンベルク響、バイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響などに客演し、高い評価を得る。また、ザールブリュッケン音楽大学指揮科正教授も務めている。

日本では読響のほか、N響、大阪フィルなどと共演し、16年から5シーズンにわたり新日本フィルの音楽監督を務めた。ホテルオークラ音楽賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞・特別賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。

読響とは1998年以降共演を重ね、ベートーヴェン、ブラームス、R. シュトラウス、マーラーなどを指揮し、多くの名演奏を残している。ピアニストとして《読響アンサンブル・シリーズ》にも度々登場している。

2/19
大阪定期

2/21
土曜マチネー

2/22
日曜マチネー

Maestro

2/4
定期

Artist



©Kiyotaka Saito

ヴァイオリン

諏訪内晶子

AKIKO SUWANAI, Violin

日本を代表し、世界の檜舞台で活躍するヴァイオリニスト。1990年史上最年少でチャイコフスキー国際コンクール優勝。これまでにサヴァリッシュ、スクロヴァチェフスキ、ブーレーズ、マゼール、メータらの指揮で、ボストン響、フィラデルフィア管、パリ管、ベルリン・フィルなど国内外の主要オーケストラと共演している。BBCプロムス、ルツェルン等の国際音楽祭にも多数出演。幅広いレパートリーを持ち、近現代作品の演奏にも定評がある。2012年より「国際音楽祭 NIPPON」を企画制作し、同音楽祭の芸術監督を務めている。使用楽器は、日本にルーツをもつ米国在住のDr. Ryuji Uenoより長期貸与された1732年製作のガールネリ・デル・ジェズ「チャールズ・リード」。



©Julia Wesely

チェロ

鳥羽咲音

SAKURA TOBA, Cello

類稀なる音楽性を持つ新鋭チェリスト。2005年ウィーン生まれ。6歳から毛利伯郎に師事。国内外のコンクールで優勝・入賞し、注目を浴びる。2019年の日本フィルとの共演以降、N響、京都市響などと共演。20年にNHK-FM「リサイタル・パッショ」、22年に東京・春・音楽祭に出演。読響とは23年8月、24年5月と共演を重ね、喝采を浴びた。服部真二音楽賞、若林暢音楽賞を受賞。25年よりアンネ=ゾフィー・ムター財団奨学生。23年6月と9月には「ムター・ヴィルトゥオージ」のメンバーとして欧州ツアーに参加した。22年よりベルリン芸術大学にてJ-P. マインツに師事。使用楽器はアンネ=ゾフィー・ムター財団より貸与された1840年製作のジャン=バティスト・ヴィヨーム。

2/13
名曲2/15
横浜マチネー

Artist

フレッシュな感性と深い音楽性を兼ね備えた新星。2025年10月に出場したショパン国際コンクールの模様がNHKのドキュメンタリー番組で放送され注目を浴びる。01年、ドイツ・デュッセルドルフ生まれ。ロンドンのパーセル音楽学校を経て、現在はヴァイマルのフランツ・リスト音楽大学で研鑽を積む。21年にはクララ・ハスキル国際コンクールで優勝し、聴衆賞なども併せて受賞した。25年岩谷時子Foundation for Youth受賞。デュッセルドルフ響、ポルト・カーザ・ダ・ムジカ管、ホーフ響、イエナ・フィルなどとも共演している。マリンスキー国際ピアノ・フェスティヴァル、ヴヴェイ・クラシック・フェスティヴァルなどに出演し、各地で絶賛されるなど、活躍の場を広げている。読響とは23年10月以来、2度目の共演。



©Susanne Diesner

ピアノ

中川優芽花

YUMEKA NAKAGAWA, Piano

2/19
大阪定期2/21
土曜マチネー2/22
日曜マチネー

Artist

細川俊夫

ヴァイオリン協奏曲〈ゲネシス (生成)〉

音楽作品の献呈にはさまざまな形態がある。たとえばベートーヴェンは、自作の規模、宛て先の爵位や影響力の大きさ、実行の時機を慎重に見定めて楽曲を献げた。その行為が内心の発露であることに間違いはないのだが、それよりもむしろ、作曲家は献呈を社会的装置として利用する意識を強く持っていたようだ。

細川俊夫（1955～）は2020年、ヴァイオリン協奏曲〈ゲネシス（生成）〉を書き上げ、演奏家のヴェロニカ・エーベルレに献げた。国際的な作品委嘱事業に基づく創作とはいえ、そこには細川のエーベルレに対する敬意が色濃くにじむ。作曲家はエーベルレの出産を祝い、「彼女とその息子マキシムへのプレゼント」としてこの作品を贈る。ヴァイオリニストが最初に受け取った楽譜には「マキシムのために歌うこと」という注釈／表情記号があったという。ここに、母子への温かい眼差しを感じることができる。実際、エーベルレ自身も、この言葉が「心の琴線に触れた」と述懐している。

こうした経緯もあり、〈ゲネシス（生成）〉はその名の通り、人間の誕生とその後の歩みとを象徴的に表現している。ひと続きの協奏曲は7つの部分からなるが、ここではそれにこだわらず、一体の作品としてその内容に触れたい。

捉えどころなく揺れ動く音の海（作曲家によると「羊水の追憶」）に、脈動を思わせるハーブと、まだ不定形のヴァイオリン独奏とが浮かび上がる。独奏は総奏の揺れをなぞるが、やがて独自の動きをするようになる。独り立ちをするかのようにカデンツァ風の部分に入った独奏はその後、管弦楽各パートとの対話を試みるも、やり取りはいささか刺々しい^{とげとげ}。ふたたび独白しはじめたヴァイオリンに、フルートとチェロが手を差し伸べる。改めて自省する独奏に管弦楽が激しく応答する。冒頭の揺れ動きの回想を経て、ヴァイオリンとオーケストラは、“個”と“環境”の関係を超えて融合する。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2020年／初演：2021年5月19日、ハンブルク／演奏時間：約18分

楽器編成／フルート2（ピッコロ、アルトフルート、バスフルート持替）、オーボエ、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、打楽器（大太鼓、鞭、トライアングル、ゴング、銅鑼、ボンゴ、木魚、ヴィブラフォン、シロフォン、マラカス、リン）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ブルックナー

交響曲 第7番 ホ長調 WAB107 (ノヴァーク版)

アントン・ブルックナー（1824～96）の交響曲は、初期の習作を除くと、未完の第9番を含め全部で10曲。第1番の次に書かれ、のちに「無効」とされたいわゆる第0番があるから、そうした計算になる。口さがない人は、「彼は同じ交響曲を10回書いた」などと言う。曲頭はいつも「静から動へ」のパターン。そこかしこに総休止やユニゾンが現れるのも同じならば、一定のリズムが延々と繰り返されるのも同じ。つまり、どの曲も似かよっているというわけだ。

オーストリアはリンツ近郊のアンスフェルデンという小村の生まれ。青年期のブルックナーは、「オルガン弾きにして教師」であった。やはりリンツ近郊の、聖フローリアン修道院がその舞台である。ウィーンで高名な音楽理論家に弟子入りし、音楽家になると決めたのは31歳のときだった。

「交響曲作家ブルックナー」の芽ばえを、1863年と定めよう。この年、習作交響曲のスケッチを始めた直後に、歌劇〈タンホイザー〉のリンツ初演を通して、はじめてワーグナーのオペラを体験。以後、この管弦楽法の革命家が、ブルックナーにとって「巨匠中の巨匠」となった。この3年後に、記念すべき交響曲第1番が完成する。ブルックナーは41歳になっていた。

その後、ウィーン音楽院の教授職に就いたのを機に、この音楽の都に活動の拠点を移す。そして交響曲を書きついでゆくのだが、周囲の反応は概して冷ややかなものだった。不動の地位を築いたのは、ようやく60歳になってから。それをもたらしたのが、ほかでもない交響曲第7番であった。1884年の初演は、アルトゥル・ニキシュ指揮ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管による。その後も各地でよく取り上げられた。

本作が大きな抵抗にあわなかった理由の一つに、ここへきて旋律美が前面に打ち出された点が挙げられよう。ブルックナー交響楽は、当時あまりに斬新と映っていたのであり、そうした面が後退したように見えたのだ。前作のリズミックだった第6番と比べても、きわだった対照をなしている。10曲みな同じというのは、やはり不当だろう。

第1楽章 冒頭、弦楽のトレモロに乗ってのびやかに奏でられるチェロの旋律（第

1主題）が印象的。この旋律の最初の音程、下行4度は、本作全体をぬい合わせる音程とみてよい。第2主題は、金管楽器のやわらかな同音連打に乗って、オーボエとクラリネットが吹く。やがて管弦ともに嵩を増してゆき、頂点でそれが突如やむと、踊るような第3主題が弦楽に現れる。壮大なコーダでは、教会堂の鐘という鐘が共鳴するかのようだ。

第2楽章 1883年2月13日、ワーグナーが世を去った。その報せを聞いたとき、ブルックナーはちょうど本楽章のクライマックス部を作曲中だったという。その部分（ノヴァーク版ではここに打楽器のパートが記されている）が静まったあとの悲しげな金管五重奏は、葬送の音楽。ワーグナーの発明による楽器「ワーグナー・チューバ（テナーとバス）」が重奏に加わっているが、この楽器は本楽章の冒頭でも鳴っている。その厳かな旋律が第1主題で、やはり下行4度で開始。やさしい音調の弦楽による第2主題は、逆に上行する4度で始まる。

第3楽章 スケルツォ（快速かつ諧謔的）ートリオ（ゆるやかな中間部）—スケルツォの3部形式。本作中もっともリズミックなこの楽章を、ブルックナーは最初に完成させた。他の楽章とは一見異質にみえるが、トランペットで短く示されるスケルツォ主題の締めくくりは、またしても下行4度だ。

第4楽章 冒頭部は、第1楽章冒頭のいわば縮小コピー。ヴァイオリンが下行4度で始める第1主題は、いかにも楽しげだが、第1楽章冒頭のあのチェロの旋律を变形したものである。静かな讃美歌ふうの第2主題を経て、突然、全管弦楽が声を合わせる第3主題は、巨漢の不器用な踊りのよう。ユーモアが本楽章の一つの特徴だ。最後に第1楽章の第1主題が回帰し、交響曲は円を閉じる。

〈舩木篤也 音楽評論〉

作曲：1881～83年／初演：1884年12月30日、ライプツィヒ／演奏時間：約64分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、ワーグナーチューバ4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（シンバル、トライアングル）、弦五部

ウンスク・チン
スピト・コン・フォルツァ

ウンスク・チン (1961～) は、韓国・ソウル生まれ。独学でピアノと音楽理論を学び、ソウル大学でベルリンから帰国したばかりのスキ・カンに作曲を師事した。1985年ガウデアムス国際作曲賞第1位となり、同年ドイツ学術交流会 (DAAD) 奨学金を得て留学。ハンブルク音楽演劇大学でジェルジ・リゲティの指導を受けた。1988年からベルリンに移り、ベルリン工科大学で電子音楽にのめり込んだ。その後、ガウデアムス財団の委嘱で作曲された〈折句一言葉の遊戯〉(1991～93) で一躍注目を浴び、2004年にヴァイオリン協奏曲 (2001) でグロマイヤー賞を受賞。以来、ベルリンを拠点に国際的な活躍を続けている。

彼女のオーケストラ曲は、細部まで緻密に作られ、色彩感豊かに構成される。アジア、ヨーロッパ、アメリカの著名な楽団からたびたび委嘱を受ける、いま最も人気の高い作曲家のひとりである。

〈スピト・コン・フォルツァ〉は、2020年のベートーヴェン生誕250年を記念して、BBCラジオ3、ケルン・フィルハーモニーホール、ロイヤル・コンサートヘボウ管の共同委嘱で作曲され、同年9月にクラス・マケラ指揮ロイヤル・コンサートヘボウ管によって初演された。「スピト・コン・フォルツァ (突然、強く)」は、ベートーヴェンが好んで使った発想記号である。「火山の噴火から極度の静寂までの大きなコントラストが私を惹きつける」(チン) と語っているように、次々とテクスチュアが変化する。冒頭アレグロ・コン・ブリオ (これもベートーヴェンが好んだ速度標語である) の八音に導かれる爆発から静謐な弦楽器へと突然移行する。分割された弦楽器の繊細なテクスチュアの間をピアノと打楽器が縦横無尽に駆け巡り、ホルンとトランペットの変口音の同音反復の動機が輝かしく繰り返されたあと、静寂に向けて強弱の変化を続けながら結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2020年／初演：2020年9月24日、アムステルダム／演奏時間：約5分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、打楽器 (小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン、ヴィブラフォン、マリナー、鐘、鞭、ギロ、銅鑼、クロティル、ゴング)、ピアノ、弦五部

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品19

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827) のピアノ協奏曲第2番の成立過程は複雑である。出版順で第2番となったが、第1番よりも前に着想された。スケッチ帳の研究などから、ボン時代の1786年頃から90年にかけて作曲され (第1稿)、さらに手を加えたものがウィーンに来て2年目の93年に完成 (第2稿)、1794/95年に第3稿、98年に第4稿が作られた。度重なる改訂によって、作品にはハイドン (第2稿) やアルブレヒツベルガー (第3稿) のもとでの学習の成果や、ウィーンでの様々な経験が反映された。そこに青年ベートーヴェンがモーツァルトの影響から脱却し、ピアニストから作曲家へと成長していく姿を重ねることができだろう。

初演は、1795年3月29日にウィーンのブルク劇場にピアニストとして公開デビューした演奏会においてと伝えられてきたが、近年の研究で演奏されたのは第1番であることが確認され、正確な初演年代は不明である。明るくのびのびとした音楽だが、動機労作には到達していないものの主題の要素の組み合わせや、巧みで頻繁な転調等、すでにベートーヴェンの個性が表れている。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ オーケストラが力強く主和音を分散和音で奏し、穏やかな流れの動機が続く。付点のリズムと弱音のレガートの要素を結び付けた第1主題が示される。独奏ピアノはモーツァルト風の優美な旋律で登場したあと、改めて第1主題を提示し、大らかで明るい第2主題とともに展開する。

第2楽章 アダージョ オーケストラによって示された主題を独奏ピアノが自由に変奏していく。音符の細分化や様々な装飾が付加され、表情豊かに展開する。

第3楽章 ロンド モルト・アレグロ リズムが弾むロンド主題の間に二つの新しい主題がはさまれる。いずれも6/8拍子のリズムを攪乱するリズム上の工夫を含んでいるところがユニークである。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1786年頃～98年／初演：1795年3月以前／演奏時間：約28分
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏ピアノ

2/13
名曲2/15
横浜マチネー

Program Notes

マーラー

交響曲 第1番 二長調〈巨人〉

グスタフ・マーラー（1860～1911）の創作の柱は、交響曲と管弦楽の伴奏による声楽曲とされる。交響曲第1番は、連作歌曲集〈さすらう若人の歌〉（恋に破れた若者が悲しみから立ち直る心の葛藤を描いた歌詞は、しばしばマーラー自身の恋愛体験と重ねて語られる）と相前後して1884年頃に着手された。当時マーラーは、ドイツ・カッセルの王立プロイセン劇場次席楽長で、この劇場の正指揮者とたびたび衝突しながらも成功を積み重ね、カッセルからプラハ、そしてライプツィヒ、ブダペストと指揮者としての地位を高めていった。多忙な日々のなかで、作曲は思うように進まなかったが、1888年2月から3月の間に仕上げられた。同年10月にハンガリー王立歌劇場の音楽監督に就任すると、マーラーは、瞬く間にこの歌劇場をヨーロッパ屈指の劇場へと評価を高めた。その勢いのまま翌年11月20日にこの交響曲はブダペストで、5楽章構成の「2部から成る交響詩」として作曲者自身の指揮で初演された。

聴衆の反応は芳しくなかった。マーラーは全体に手を加え、1893年にハンブルクで再演された際には、タイトルを〈『巨人』、交響曲形式による音詩〉と改め、各楽章に標題的なタイトルを付した。前半を第1部『青春の日々から、花、果実、荊棘の章』として、第1楽章「春、そして終わりなく」（序奏とアレグロ・コモド、序奏は長い冬の眠りから目覚める自然を描く）、第2楽章「花の章」（アンダンテ）、第3楽章「帆に風をはらんで」（スケルツォ）、後半の第2部『人間喜劇』は、第4楽章「座礁して」（カロ風の葬送行進曲）、第5章「地獄から」（アレグロ・フリオーソ）深く傷ついた心から絶望が突然爆発するように、と記された。タイトルの〈巨人〉というのは、当時マーラーが愛読していたジャン・パウル（1763～1825）の長編小説の名に由来するものである。

ハンブルクの再演は成功を収めたが、現行の4楽章版になったのは、1896年にベルリンで演奏されたときからで、第2楽章を削除、タイトルやプログラムも全て取り去られ、「大オーケストラのための交響曲」に改められた。

第1楽章 ゆるやかに、重々しく、自然の響きのように～常にきわめてくつろいで、二長調 長大な序奏は、持続するイ音の響きの間を縫うように、クラリネットとホ

ルンの断片的な音型が登場する。狩りの角笛を思わせるファンファーレが響き、クラリネットによるカッコウの鳴き声のモティーフが現れ、主部の第1主題が導き出される。第1主題は、〈さすらう若人の歌〉の第2曲「朝の野べを歩けば」からの引用。第2主題も同じ旋律の後半から作られた。展開部ではシューベルトを思わせる動機や4本のホルンによる行進曲風の動機が展開し、これらは他の楽章でも変形して現れる。

第2楽章 力強く運動して、しかし速すぎずに、イ長調 冒頭から低弦が4度下行音程を打ち、軽快なレントラー風の主部が始まる。中間部のワルツ風のトリオは、華美で甘い旋律に満ちている。

第3楽章 荘重に威厳をもって、ひきずらないように、二短調 4度音程のティンパニに導かれ、コントラバスが民謡〈フレール・ジャック〉を短調にした旋律を奏する。マーラーの言うところの「カロ風」（カロとは17世紀の風刺銅版画家で、E. T. A. ホフマンの「カロ風幻想曲集」から着想を得た）の風刺とグロテスクな雰囲気作られ、カノン風に他の楽器に受け渡され、高まっていく。中間部には〈さすらう若人の歌〉の第4曲「いとしき人の青いふたつの瞳」の後半部分が引用される。そこで描かれるのは、愛も苦悩も世間も夢もすべて受け入れる、とした若者の姿である。

第4楽章 嵐のように激動して、ヘ短調～二長調 長い序奏と大規模なコーダを持つ巨大な終楽章で、第3楽章から切れ目なく爆発的に始まる。序奏と第1主題前半の素材は、第1楽章の展開部の動機に由来する。また展開部は、第1楽章の序奏で始まり、カッコウの4度音程など、第1楽章の素材が再び用いられる。圧倒的なクライマックスを作り上げ、まさに「地獄から天国へ」となだれ込む。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1884年頃～88年／初演：1889年11月20日、ブダペスト（5楽章版）／演奏時間：約53分
楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ4（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット、エスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン7、トランペット5、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、弦五部

2/13
名曲2/15
横浜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

幻想序曲〈ロミオとジュリエット〉

2/19
大阪定期

2/21
土曜マチネー

2/22
日曜マチネー

Program Notes

許されざる恋が、ふたりの死をもって終わる。本日のプログラムで題材となった『ロミオとジュリエット』も『ペレアスとメリザンド』もそんな物語だ。そして、ともに作曲家たちが好んで取り上げてきた題材でもある。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』は、ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）の幻想序曲をはじめ、グノーのオペラやベルリオーズの劇的交響曲、プロコフィエフのバレエなど、数々の傑作の着想源となった。

ただし、チャイコフスキーは自らこの題材を選んだのではない。作曲を勧めたのはロシア5人組の中心人物だった作曲家バラキレフ。若き日のチャイコフスキーに対して、バラキレフは手厳しい批評や助言を寄せて、厳格な師としてふるまった。チャイコフスキーはバラキレフに敬意を抱きつつも、自らとは相いれない音楽観に複雑な思いを抱いていた。なかなか筆の進まないチャイコフスキーに対して、バラキレフは冒頭の譜例まで書いて送りつけたという。さすがにこれにはチャイコフスキーも辟易^{へきえき}したようだが、完成された作品に対してバラキレフは「これまでで最高の出来ばえ」と称賛した。1870年の初演後、バラキレフの意見を取り入れて改訂され、さらに80年にも再度の改訂を経ている。

曲はクラリネットとファゴットによる荘重で物悲しい序奏で開始される。賛美歌風の曲想は〈ロミオとジュリエット〉の登場人物、修道僧ロレンスを連想させる。やがて叩きつけるような主題とともに主部に入り、物語の背景となるモンタギュー家とキャピュレット家の激しい対立を表現する。対立の後に訪れるのはロミオとジュリエットの甘美な愛の場面。ふたたび両家の争いが始まると、修道僧ロレンスの主題や愛の主題を交錯させながら高潮し、最後はふたりの死を表現して悲痛に曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1869年、70年改訂、80年再改訂／初演：1870年3月16日、モスクワ／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル）、ハープ、弦五部

2/19
大阪定期

2/21
土曜マチネー

2/22
日曜マチネー

Program Notes

チャイコフスキー

ロココ風の主題による変奏曲 イ長調 作品33

〈ロココ風の主題による変奏曲〉は、チャイコフスキーによる独奏チェロとオーケストラのための協奏的作品。「ロココ」とは本来、美術や建築の分野で用いられる言葉だが、音楽の分野ではおおむねバロック期から前古典派までの優雅で洗練されたスタイルを指すことが多い。つまり、チャイコフスキーの時代から見れば、ずっと古い時代のスタイルだ。曲の冒頭、オーケストラの簡潔な序奏に続いて、独奏チェロがツンと澄ましたような表情の主題を奏でる。この「ロココ風の主題」に7つの変奏（後述のようにもともとは8つ）とコーダが続き、多彩な表情が作り出される。「主題と変奏」という楽曲形式や、木管楽器各2本とホルン2本および弦楽器というコンパクトな楽器編成も、古典的なスタイルを意識した趣向といえるだろう。

多くの協奏曲と同様、この曲も特定の名手のために書かれている。チャイコフスキーは友人のチェリスト、ヴィルヘルム・フィッツェンハーゲンのために曲を書いた。ところが、チェロ・パートの校訂を頼まれたフィッツェンハーゲンは、チャイコフスキーに無断で曲に手を入れ、変奏をひとつカットし、変奏の順番も変更してしまう。作曲者がこれを喜んだはずはないが、フィッツェンハーゲン版は好評を博し、そのままの形で作品が広まることになった。フィッツェンハーゲンへの配慮からか、チャイコフスキーもこの版を黙認している。

フィッツェンハーゲンは、原曲で曲の半ばに置かれたもっともスリリングな変奏を、曲のおしまいに配置している。演奏効果の高い変奏で幕切れを華やかに飾りたいと考えるのは、ステージに立つ演奏者として自然なことだろう。近年は作曲者が意図した形を復元した原典版が用いられることもあるが、依然としてフィッツェンハーゲン版の人気は高い。本日もフィッツェンハーゲン版が使用される。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1876～77年／初演：1877年11月30日、モスクワ／演奏時間：約18分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦五部、独奏チェロ

フォーレ

付随音楽〈ペレアスとメリザンド〉組曲

モーリス・メーテルリンクの戯曲『ペレアスとメリザンド』が書かれたのは1892年。同作の象徴主義的世界観は世紀末の作曲家たちの創作意欲を刺激した。まずはガブリエル・フォーレ（1845～1924）が付随音楽〈ペレアスとメリザンド〉を書き、続いてドビュッシーがオペラを、シェーンベルクが交響詩を、そしてシベリウスが付随音楽を作曲した。

物語の舞台は中世の架空の国アルモンド。王子で寡夫^{かふ}のゴローは、森で若く美しい女メリザンドと出会う。ゴローは謎めいたメリザンドを城に連れ帰って妻にする。しかし、メリザンドはゴローの異兄弟ペレアスと親密になってしまう^{しつと}。嫉妬^{さいど}と猜疑^{さいぎ}の末にゴローはメリザンドと密会中のペレアスを刺し殺す。メリザンドも子を残して息絶える。

1898年、イギリスの女優パトリック・キャンベルはロンドンで『ペレアスとメリザンド』を上演するために付随音楽の作曲をフォーレに依頼した。短期間での完成が求められたため、劇場楽団用のオーケストレーションは弟子のケ克蘭に任された。その後、フォーレは自らのオーケストレーションで組曲を編んだ。

第1曲「前奏曲」 冒頭、弦楽器による柔和な主題はメリザンドをあらわす。後半で遠くに聞こえるホルンはゴローを表現する角笛。

第2曲「糸をつむぐ女」 弦楽器が細かい音型を反復して回転する糸車を表現する。オーボエがニュアンスに富んだメロディを重ねる。

第3曲「シシリエンヌ」 フルートとハーブが奏でる清らかな旋律はよく知られている。しばしば単独で演奏される人気曲。

第4曲「メリザンドの死」 痛切な葬送の音楽。重い足取りの葬列に静かな吊いのトランペットが重なる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1898年（全曲）、1900年（組曲）／初演：1898年6月21日、ロンドン（全曲）、1901年2月3日、パリ（組曲）／演奏時間：約18分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、ハーブ、弦五部

2/19
大阪定期

2/21
土曜マチネー

2/22
日曜マチネー

Program Notes

2/19
大阪定期

2/21
土曜マチネー

2/22
日曜マチネー

Program Notes

ラヴェル ボレロ

モーリス・ラヴェル(1875～1937)と親交を結んだ女性に、ロシア出身のバレエ・ダンサーのイダ・ルビンシテインがいる。裕福な家庭に生まれ、恋多き女性でもあった彼女は、ラヴェルに対して常に親身になって接していたという。ルビンシテインはラヴェルにスペイン風のバレエ音楽を書いてほしいと依頼した。当初、ラヴェルはかねてより高く評価していたアルベニス作曲のピアノ曲〈イベリア〉をオーケストレーションするつもりだった。

ところが、編曲に取り組もうとした矢先、〈イベリア〉のオーケストレーションの権利はすでにスペインの指揮者でアルベニスの友人でもあるエンリケ・フェルナンデス・アルボスが持っていることが判明した。動転したラヴェルはルビンシテインに事の次第を伝え、急遽、新たにオリジナルの作品を書くことを決める。曲は当初〈ファンダンゴ〉の題で構想され、やがて〈ボレロ〉の題に改められた。

曲は基本パターンの反復と、全曲を通した大きなクレッシェンドによって構成される。冒頭で小太鼓がボレロのリズムを刻み、このリズムが延々と続く。そこに作曲家が「没个性的で、お決まりのスペイン=アラブ風」と呼ぶエキゾチックな主題が登場する。この主題が次々と楽器を替えて奏でられる。まずはフルートで。次はクラリネットで、さらにファゴットで、エスクラリネットで、オーボエ・ダモーレで、フルートとトランペットの組合せで……。同じリズムと同じメロディがひたすら繰り返される。珍しいトロンボーンのソロなど、腕利き奏者たちのソロ自慢の様相を呈しながらも、さまざまな楽器の組合せがカラフルな響きを作り出す。クレッシェンドが頂点に達すると、突然、滝が流れ落ちるように曲を閉じる。ラヴェルによれば「オーケストラの扱いは簡素かつ明快で、名人芸を目指したところは微塵みじんもありません」。はたして本心からそう思っていたのだろうか。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1928年／初演：1928年11月22日、パリ／演奏時間：約13分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（オーボエ・ダモーレ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、テナーサクソフォン、ホルン4、ピッコロトランペット、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部